倉本聰研究

北海学園「北海道から」編集室・編

理論社

倉本聰研究

北海学園「北海道から」編集室・編

倉本聰研究

NDC914
四六判 20cm 292p
1990年3月初版
ISBN4-652-07145-0

編集　北海学園「北海道から」編集室
発行　株式会社 理論社
発行者　鈴木良司
〒162 東京都新宿区若松町15-6
電話 営業 (03)203-5791
出版 (03)203-5794

1990年3月第1刷発行
©学校法人 北海学園 1990 Printed in Japan.
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

制作　P&P/山村光司
印刷　堀内印刷/方英社/よねむら写植
製本　誠製本

倉本聰研究

装幀　ポッド

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

目次

はじめに　倉本聰研究の始発　6

倉本聰氏　その風貌さまざま　八千草薫、堤堯明、船村徹、岸田今日子、地井武男、斎藤禎、野際陽子、高橋延清、堂垣内尚弘、坂本春生、林健嗣、嶋宮勲、池内淳子、佐藤威一郎、安藤明子、石井信之、名取志津、山田太一　8

（インタビュー）倉本聰――歩いてきた道、そして今――　インタビュアー　山根對助　32

倉本聰　その国民文学的創造〔ある編集者的作家論〕　小宮山量平　58

「赤ひげ」黒澤明と倉本聰　鷲田小彌太　68

倉本聰の庶民観　神谷忠孝　74

「ニングル」が黙示するもの　倉島　壽　84

倉本聰の発見した北海道語　小野米一　92

雪ふりつむ「幻の町」演出雑記　守分寿男　104

（シンポジウム）「北の国から」研究　報告者　高橋世織、多海本泰男、中村久子、合田一道　司会　菱川善夫　116

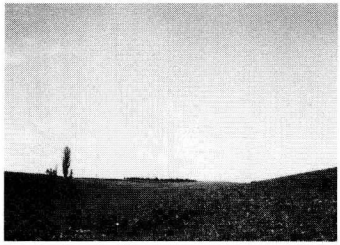
倉本聰のシナリオ史　石森史郎　142

倉本聰における〝新進〟について　志賀信夫　152

（対話）倉本脚本との格闘〔撮影の現場から〕　石橋　冠、杉田成道　158

倉本文学の展開　北海道へ・北海道で・北海道から　今井美樹子、恩村雅子　172
（座談会）北の国・富良野・から（富良野紳士談義録）　仲世古善雄、相澤實治、茶畑和昭、宮川泰幸　司会　今野洲子　190
倉本聰　コマーシャルの文章　208
富良野塾の四季　鶴田玲子　212
北国からのメッセージ（BSサマー・スペシャル）　230
（資料）倉本文学への招待　倉本文学研究会　235
（資料）倉本聰研究のための参考資料一覧　山根はるか編　266
（資料）倉本聰年譜　本誌編集部編　274
あとがき　山根對助　290

本書は北海学園発行の雑誌「北海道から」（一九八九年一〇月刊）をそのまま収録したものです。
写真＝上田久仁生



倉本聰研究の始発

はじめに

たとえば、広い知見を有するはずの鶴見俊輔氏。倉本聰氏を組み込んでの現代日本文化論を見たことがない。その他凡庸の徒の論はいうをまたぬ。それらは惰性、ないし知的怠惰を示す以外のものではない。ほんとうは――倉本聰氏の業績を無視して現代日本の文化を語ることはできないのではないか、という思いがあった。

その業績は多彩である。『時計』では映画監督、『昨日、悲別で・オンステージ』、『谷は眠っていた』では舞台演出者、後進育成のための私塾「富良野塾」の主宰者。そして、テレビ、ラジオ、映画のシナリオ作者。また、それらのシナリオは新しい文学表現として多くの読者を得、読みつがれているのである。

なかでも、'81年にスタートし現在につづく『北の国から』は、失いかけていた真正日本人の暮しと心を甦らせ、人々の心を激しく揺り動かしつづけている。じつに三千万人以上もの日本人が、この作品を注視しているのだ。

いわゆる文化人の「文化」でなく、ひろく国民大衆の中でひっそりと息づいていた「文化」が倉本氏によって再発見され、国民大衆に贈り届けられたというべきか。

再発見といえば、だれもが捨てて顧みなかったもの、倉本氏によって取り出され、見せられて、あらためてその価値に気づいた北海道人。まさしく倉本氏は北海道人の心の眼を開いたのであった。北海道にとって真に必要な情報の提供をめざす本誌は、倉本氏への謝意をこめてこの特集に取組んで一年余。

この特集は、ごらんのように北海道在住の者を中心として、各界知名の方々にも御参加いただき、さまざまの角度から倉本氏の人と業績を考究している。

企画立案の段階で、本誌は参加者に特集の意図をつぎのように説明した。

この特集は、倉本聰の人と芸術の本格的研究の嚆矢としての栄光をになうことになりますが、どの一編も倉本聰研究の基本文献としての生命を長く保持するものでありたい、そして全体としても倉本聰の人と芸術を考えるさいの不可欠の研究書となることをめざしております。

結果やいかに。読者の判定をまつのみ。

倉本 聰氏
その風貌さまざま

親しい交遊を通じて、倉本さんをよく知る
知己友人たちが描く、ある日その時の横顔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

塩、袋ごと

八千草　薫（女優）

「えッ何んですって！　フラノ？」

「そうです。北海道の富良野というところに、とてもいい場所があるんですよ。見に行きましょうよ」

その頃、倉本さんと私たち夫婦は何処か都会を離れた土地に、小さな家を持ちたいという共通の願いをもっていました。東京からの距離を考えると、せいぜい長野県周辺だとなんとなく決めていた私は、海を渡って北の端まで行ってしまうのかとびっくりしました。といっても主人も私も北海道大好き人間で、私は二十数年前から、そして主人は昔から映画を何本も北海道で撮っていましたから、驚くと同時に子供みたいにワァッと嬉しくなって、早速倉本さんに連れていって頂きました。

目的の場所は、町のなかなのにまだ太い樹木が残っている原生林の面影があって、とてもいい場所でした。一つの区画を倉本さんが三分の二、私が三分の一に分けあうことになりました。

一年経ち、二年経ち、倉本さんは家をお建てになり、いつ東京に戻って来られるのかなと思っているうちに、すっかり北海道の住人になってしまわれました。

私もひとりで出来る仕事だといいのにと思いながら、いまだに私の土地は倉本家の敷地のなかに居候中です。

北海道に移られてからの倉本さんの生活ぶり、豊かで情熱的なお仕事の御様子は、もう今更申し上げるまでもないことです。

今年の冬「谷は眠っていた」の東京公演で、久しぶりに倉本さんにお会いしました。出演者の皆さんの飾らない素朴な情熱に感動しました。そして倉本さんが富良野塾にどんな想いをこめていられたかを改めて知らされました。

帰るとき入口に塾生さんたちがずらっと並んで、お客さんたちをお見送りしていました。内容が塾生さんたちが実際に経験した事を演じていることもあって、彼らの笑顔と涙が彼らの生き方そのものを象徴しているように思えて、私も涙がとまりませんでした。何も言えずただ、倉本さんにお礼の気持ちをこめて会釈をしました。その時の倉本さんの表情が、昔と少しも変っていらっしゃらない事に気がつきました。始めてお会いした頃と変りない、優しい眼でした。

太宰治の小説の女の子がいったように、きれいなものを沢山見てきたから、きれいな眼をしている、というように。北海道の大きな自然の中で謙虚につき合う、そんな生活をしていられるからなのか。自然に対してあまりにも傲慢になってきた現代の人間は、そのうち自分の眼が、険しく乾いた眼になってしまったことを発見するはめになるかも知れない——。

車に乗ると十年ほど前倉本さんの車にのせて頂いた日を思い

出しました。私の母は倉本さんを大変尊敬していました。その母が亡くなった時、私は舞台に出演していて、お葬式も夜の公演に支障のない時間にすまさなければなりませんでした。気が動転してぼやっとしている私を倉本さんが御自分の車で火葬場から楽屋まで送りましょうといって下さいました。

車が走り出して間もなく、「あッお塩！お塩がない。清めのお塩！」このまま楽屋入りするわけにはいきません。「それじゃ知り合いの料理屋さんに寄って貰っていきましょう」倉本さんはそういって下さり私はホッとしました。

料理屋さんの勝手口から出ていらした倉本さんは、「塩っていったら袋ごとくれちゃったんですが――」

塩の袋をかかえ、私は楽屋入りしました。悲しいけど、とても有難く、おかしかった日、倉本さんの暖かさが身にしみた日でした。

ここちよい余韻

堤　義明（西武鉄道・会長）

倉本氏が北海道富良野に居を構えて以来、仕事柄、年に数回の北海道行きの際に、できるだけ都合をつけて、氏のお宅にお邪魔するのを楽しみにしている。

氏とは麻布学園の同級生であるという以上に、何故か気が合い、お互い忙しさの中、久しぶりに会った時には話がはずみ、酒を飲みながら夜を徹してしまう事もしばしばである。

脚本家という職業柄か、私にとっては未知のジャンルのあれこれを、あの淡々とした外見に似ず、非常に興味をそそられるようなウィットに富んだ話し口で語られるのだからたまらない。また聞き手としての彼も、私の気持を妙にホッとさせ、くつろがせてくれる。相手に対して気持を構えずにつき合えるというのはありがたい。

私はテレビのゴルフ番組を見るのが好きだ。選手たちのプレーもさることながら、画面いっぱいに広がるグリーンと空の青さに心が洗われるようで、気分爽快になる。

このなんとも言えない「さわやかさ」を、倉本氏の作品に登場する人物たちは、みんな心の中に持っていると思う。氏の作品を読み終えたあと、心に残るここちよい余韻は、美しい自然を堪能したあとの感動と共通しているとは言えまいか。

新しい著書が出版されると必ず送っていただいているが、そのたびに私は、人をこのように感動させる作品をつぎつぎ生み出す氏の才能と感性にただただ敬服する。そして、その作品の登場人物が、たぶんに氏の人となりを反映している事は、まちがいない。

倉本氏との、たまの酒席のあとの満足感は、だから私にとっては、なかなか味わうことの出来ない貴重なものなのだ。とか

く親友を持たないなどと世間で言われている私だが、そんな私にとって倉本氏は、腹をわって話が出来る数少ない友人の一人である。

夏が消し去った再会

船村　徹（作曲家）

NHK札幌のY君という若いディレクターから、思い出したように電話が入った。七月の三十日に富良野までお越し願えないか、という。

カレンダーを繰ってみると、あといく日もない。鳥が飛び立つような急な話である。でも、Y君とは、当然のこと以前にも良い仕事をしており、テキパキとした現場の捌きなどにも好感を持っていたので、なんとか応ぜずにはなるまい、と肚をくくった。

そもそもこの度は、ナマの衛星放送とか。

しかも倉本さんの主宰する〝富良野塾〟がキーステーションとなり、「北の国からのメッセージ」という内容の番組になる模様で、久しぶりに、倉本さんとお逢いできるのが楽しみだった。

ところが、あにはからんや、天下のNHKさんをもってしても、列車の切符がとれないというのだ。どうもこの時期夏休みと重なって、毎度のことながら乗り物では往生する。

「飛行機ではやはりダメなんでしょうね」

と遠慮勝ちに打診するY君には気の毒だったが、こればかりは譲れない。飛行機アレルギー症の私としては、お断りするより術がなかった。

ところではじめて倉本聰さんとお逢いしたのは、もう二、三年前になろうか。STVの重役さんのおとり持ちで、富良野を訪れることになった。

実はそれまでに倉本さんが、かまびすしいマスコミの渦中からの離脱を図って富良野市へ居を移された、という情報は聞き知っていた。

折も折、私も都会の喧噪を嫌って、仕事場を静謐（せいひつ）な栃木のふる里に移したばかりだったので、倉本さんの心境も十全に理解していたつもりだったが、それにしても未舗装の山道を辿りたどり、正直うんざりする頃に、やっと富良野塾が忽然と現われたのが印象的だった。

私の仕事場も結構町中からはずれてはいるが、その比ではない。やはり一芸に秀でた方の徹底ぶり、というべきか、土地の選択ひとつにしても半端じゃない。ちょうど夕闇があたりをやさしく包みはじめる頃合いだったが、倉本さんは塾の建物を背に、広い庭先きで十数名の若者相手の稽古中だった。

「谷は眠っていた」という芝居の群衆シーンの稽古だった、

と後で知ったが、私の目には、単調としかいいようのないその稽古を、飽きもせず、とっぷり暮れるまでヒタ押しに続ける姿が、鬼気迫るものとして映った。

そんな倉本さんが、席を移した小料理屋でわが息子ともいうべき北島三郎のファンであると知って、実に意外の感をおぼえた。

あまつさえ倉本さんは、三郎の人気の秘密をさぐり当てるべく、付人まがいの立場に甘んじながら公演旅行にも同行した、という打ち明け話をお聞きするに及んで、今度は唖然としてしまった。

丸太小屋は、かつて竹串だった

岸田　今日子（女優）

二十数年前のこと、わたしは同級生、山谷さんの弟とニッポン放送の山谷さんと、シナリオ作家の倉本聰さんが同一人物だということを知らなかった。知る機会はいくらでもあったはずなのに、なぜそんなことになったのだろう。でもわたしは、山谷さんの弟は弟でお姉さんの顔から勝手に想像していたし、倉本さんの作品「文五捕物絵図」というのに出たときは作者に逢わなかったので、ニッポン放送のギョロ目の山谷さんが、あの山谷さんの弟で、しかも倉本さんだとわかった時は、本当に驚いてしまった。それほど、わたしが想像していた山谷さんの弟にも倉本さんにも、あの山谷さんは似ていなかったことになる。

並みの人間にできる所業ではない。

師匠の立場でいわしてもらえば、北島もって瞑すべし、という感懐につきる。それと同時に、なによりもかによりも、失礼ながらほんとうの〝モノ書き〟に接し得た思いで、感激に胸がうち震えた。

いまどきこういう方は珍しい。なればこそ再会を楽しみにしていたのだが――。

アレルギー症などといっていないで、やはり飛行機に乗ってでもお邪魔するのだったかなァーといま頃になって、後悔のホゾをかんでいるところである。

じゃあいったい、どんな人ならよかったのかといったって取り返しはつかないし、そんなことをここに書いても仕方がない。とにかくいろんなことが突然判明したとき、山谷さんはわたしにとって、いっぺんに「クラモッちゃん」になってしまった。人前ではなるべくそう呼ばないようにしているのだけれど、倉本さんというと他の人みたいなので、ここではクラモッちゃんと呼ばせていただく。

実はわたしは、北海道の方たちから感謝していただきたい立場にある。十何年も前のこと、クラモッちゃんは群馬県にあるわたしの山小屋に遊びに来て、その辺りの樹の太さにすっかり

感動してしまった。そしてその一角に家を建てたいから、土地を売ってほしいという話になった。昭和初期に父が手に入れた土地で、かなり広いけれど、ほとんど崖のような山林で、家を建てられる部分はほんの少ししかない。そこを譲ったら庭の中に道を通さなければならない。とても無理だというのにクラモッちゃんは「売ってくれればジイヤと呼んでもいい」とか、わりに本気で云っていた。やっぱりだめということになってクラモッちゃんは、北海道のクラモッちゃんになった。そしてあんなにすてきな作品が生まれたのだから、そうだ、わたしは全国のテレビ視聴者にも感謝してもらっていいのだ。

クラモッちゃんはその群馬県の山小屋に、ある年バーベキューの炉を石で造ってあげるから、その間「トウリョウ」と呼んでほしいと要請した。でも結局、面倒になったとみえて代りに鉄製のバーベキューセットと、竹串を何本も一日中かかって丁寧にけずったのを、プレゼントして下さった。思い詰めたように紙やすりをかけているクラモッちゃんの顔が眼に浮かぶ。あの竹串は大分焦げたけれど、今も嬉しく使っている。

ジイヤにもトウリョウにもならなかったクラモッちゃんは、けれども太い樹のたくさんある北海道で、若い衆を指揮して丸太小屋なんか造っているのだ。さぞ満足だろうと思うと、ジイヤ持ちになり損ねたわたしも嬉しい。

健さんのジャンパー

地井　武男（俳優）

昭和五十五年秋、連続ドラマ「北の国から」の撮影がはじまった。

それからまる一年、季節ごとに美しく変貌する北海道富良野を舞台に撮影は進められた。その中でも五十六年一、二月、真冬の撮影は、東京に住む私たちスタッフやキャストにとっては猛烈な寒さの中での連日連夜のハードスケジュール、かなり苛酷な仕事だったと今でも時々思い出す。

そんな寒さ厳しいある朝、ホテルを出発したロケ隊は、木の伐採シーンの撮影のため山の中の現場に入った。撮影のはじまるまでの間スタッフの用意してくれていた大きな焚き火を囲んで、田中邦衛さんをはじめ私たちは、ワイワイガヤガヤ雑談をしているところに、倉本さんのジープが遠くの方から近づいてきた。毎日のように倉本さんは撮影現場に現われ、私たちやスタッフに、こまかいアドバイスや注意をなさっていた。いつものようにジープから降りたった倉本先生は、「北の国から」のために御自身デザインされた黒の帽子に黒い耳あて、茶のコーデュロイのジャンパーに乗馬ズボン、長靴、ラークを銜えながらデカイ目で、

「オハヨー」…。
私たちは今までの雑談をやめ少々緊張気味になり、焚き火に両手や背中をあてたりしている。
「オイ地井、気をつけろ、あまり近づくと衣裳を焦がすぞ。北海道の火力は強いから」
「ホラ邦さんも火に近づきすぎだ！」
と先生から声がかかった。私には「北海道の火力は強いから」という先生の言葉がなぜか新鮮に聞こえた。撮影がはじまり、私たち出演者は現場に呼ばれ、すこし離れた小高い丘の上に登った。
丁度五十メートルほど離れた撮影現場から焚き火が見下ろせる位置だった。倉本先生は焚き火を背に撮影現場の方を睨みつけるように見上げている。しばらくしてワンカット撮り終え、私は何げなく先生の方を見た。先生がいつになくコソコソと、しかも無理な前向きの不自然な姿勢で何も言わずジープに乗りこむや、素早くエンジンをかけた。
「ネエ邦さん、先生どうしたんだろう。何か気分でも悪くしたのかな。帰っちゃうよ」
「エッ、ア本当だ。何だろう。地井、お前何か言ったか？」
なんて話してるうちにジープは雪の中に消えて行ってしまった。わざわざ朝早く出て来て、焚き火の側に三十分ほどいただけで、だれにも何も言わずコッソリ帰ってしまうなんて今までなかった事だけに、どうしたんだろうと心配した。事の次第は、後でわかった。
あの時、倉本先生は夢中で撮影現場を見上げていて、北海道の火力の強い事も忘れ、大切な（たしか高倉健さんから頂いて大事にしていた）ジャンパーの背中に火がついた事にも気づかず、ハッとした時にはもう背中は大きな穴があく程焦げてしまったのだ。「北海道の火力は強いから焦がすぞ」と注意されたその当の先生が御自分のジャンパーを焦がしてしまい、だれにも何も言わず帰ったのだと知った私たちは、ここぞとばかり大笑いをした。ひどく愉快だったのだ。
いたくプライドをキズつけられた先生は、十日ほどたってから、うれしそうに、そのジャンパーを着て現われた。
「サッポロで直してもらってサ」と振り返った先生の背中は、一面、茶の鞣(なめ)し皮が張ってある。テレながらも得意満面の先生はまるで、ガキ大将のような無邪気な顔をしておられた。すかさず私は、
「先生、北海道の火力は強いから注意しなきゃだめだよ！」
と言うと、
「バカヤロー」
と一段と大きな声で先生は笑った。先生のお書きになる、肌目細やかで厳しい脚本のすばらしさは、だれもがとっくに御承知の事だけど、反面、私は先生の子供のような無邪気な暖かなユーモラスな面がたまらなく好きだし、何よりも先生の大きな魅力だと常々思っております。まだまだ倉本先生のユニークな失敗談は数えきれないほど私は知っております。お聞きになりたい方は、先生に内緒でという条件づきでいつでもお話ししますよ……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.